

平成 30 年 6 月 5 日現在

機関番号：11101

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2015～2017

課題番号：15K12904

研究課題名(和文) 社会実験的アプローチによる地方都市の複言語・複文化教育モデル構築と地域活性化検証

研究課題名(英文) Development of plurilingual and pluricultural education model of local cities by social experimental approach and verification of regional activation

研究代表者

熊野 真規子 (KUMANO, Makiko)

弘前大学・人文社会科学部・准教授

研究者番号：50215026

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：新しい文化・教育パラダイムをひらく言語教育思想としてヨーロッパ言語共通参照枠(CEFR)を再認識し、多言語・多文化環境にない地方都市(弘前市)で、CEFRの理念を実践するアクション・リサーチを実施した。

その成果として、フランス語・フランス文化を切り口に地域に潜在する価値をネットワーク化し地域活性化する、フィールドワーク型・サービスラーニング型の複言語・複文化教育プログラムの雛型(フランス語モデル)を完成させ、新しい研究ネットワークや研究グループの誕生に寄与した。

研究成果の概要(英文)：We are trying to open a new paradigm for foreign language or intercultural education by recognizing CEFR(Common European Framework of Reference for Languages :Learning, Teaching, Assessment) as language educational thought. To practice the CEFR thought, we conducted action research based on social experimental approach in a local city (Hirosaki city) which is not in multilingual multicultural environment.

By networking the latent value in the region with "France" as a keyword, we developed a basic model of field work and service learning type plurilingual and pluricultural education program (French culture version), which could also contribute to regional activation. Our action research gave an impact on research in the humanities field and led to the birth of new research networks and research groups.

研究分野：人文分野(外国語教育)

キーワード：外国語教育 複言語・複文化教育 異文化間教育 まちづくり グローカル 社会実験 サービス・ラーニング フィールドワーク

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究メンバーは、本研究ではじめてチームを組んだが、それまでに、個人の複言語・複文化能力をどのように育成するか観点からの研究、自律学習を支援する「学びの場づくり」をすすめてきたという共通点もっていた。〔熊野：自律学習支援・地域発信型フランス語ホームページの構築と学習成果の検証、国枝：後述のAOPプロジェクト自律学習環境整備ユニットのメディアミックスによる授業構築、今中：多岐にわたるワークショップ、協同学習、学習環境研究、釣：共同ブログ FRENCH BLOOM NET の試み 等〕申請時は、ウェブサイトあるいはキャンパスから実社会のリアルな場での行動志向型学びの研究へと全員が関心を広げていたことから、代表者がすすめてきた「弘前×フランス」プロジェクト(複言語・複文化教育プロジェクト〔フランス語モデル〕)と連動させた社会実験への参画、それぞれの観点からの同プロジェクト成果の比較研究をよびかけ、本研究の研究計画に至った。

(2) 本研究は、複言語主義教育関連の4科研グループ共催の公開研修会(各代表：徳井、西山、大木、姫田、2014.9)でも指摘された、トップダウンの導入による CEFR (Common European Framework of Reference for Languages :Learning, Teaching, Assessment, 欧州評議会, 2001. 以下 CEFR) の形骸化と言語政策の矛盾をブレイクスルーする実践研究で、本研究によって、行動中心主義の基底にあるボトムアップのダイナミズムを取り戻し、「行動中心複言語学習(AOP)プロジェクト」(一貫教育校の特色を生かした慶應義塾大学外国語教育センターの組織的研究：2006-2011)、代表者も連携関係にあった京大グループ(大木、西山)が代表をつとめる全国規模の科研課題群の研究を実社会のリアルな場から補完する位置づけでスタートした。

2. 研究の目的

(1) 研究の全体構想は、新しい文化・教育パラダイムをひらく言語教育思想としてCEFRを再認識し、その理念を地域社会で実践する代表者の試み(複言語・複文化教育プロジェクト〔フランス語モデル〕『まちをキャンパスに!』2012~)によって、外国語・言語教育体制の再構築を促すことをめざしている。

(2) 本研究では、上記プロジェクトの複合的成果を集約する複言語・複文化環境の創出(フランス週間)、ワークショップ・ツーリズムを社会実験として実施し、新しい言語教育観に基づく地方都市の複言語・複文化教育プロジェクト・モデルの基盤を構築すること、同時に、人づくり、まちづくりに資する可能性を検証することを目的とした。

3. 研究の方法

(1) 課題の発見と対策を繰り返しながら改善をめざすAR(アクション・リサーチ)であるので、複数の研究項目を時期をずらしながら並行して行う計画で開始した。そのうち、「中高生を対象とした複言語・複文化環境創出によるグローバル感性への影響」については、社会実験の時期と中高生の試験時期が重なっていることで計画変更を余儀なくされた。そこで小学生の放課後事業との連携を試みたが、継続的に調査を行える環境が整わず、本課題研究では、「弘前×フランス」プロジェクト(複言語・複文化環境創出活動)参画学生を対象とした行動志向型アプローチの成果と課題、ワークショップ・ツーリズムをつうじた学生交流による成果と課題に重点をおくことにした。

(2) 研究代表者は、「弘前×フランス」プロジェクトおよび社会実験(複言語・複文化環境創出「弘前×フランス」週間)の全体構想と遂行、研究の総括を担当し、あわせてプロジェクト型授業「地域と世界をつなぐ」を試行し、その各事業ごとに、連携研究者による参与観察・インタビュー、あるいはアンケート等を実施、それぞれの役割の観点からの分析・考察も行い、その結果と課題を次年度の構想・プログラムにフィードバックすると同時に、それぞれが学会等で成果を発表した。

4. 研究成果

(1) 研究代表者は、「弘前×フランス」プロジェクトおよび社会実験(複言語・複文化環境創出「弘前×フランス」週間)の全体構想と遂行、研究の総括を担当し、あわせてプロジェクト型授業「地域と世界をつなぐ」の3年間の試行をつうじて、フランス語・フランス文化を切り口に地域を再発見し、地域に潜在する価値をネットワーク化し地域を活性化するフィールドワーク型かつ地域貢献型の複言語・複文化教育プログラムの雛型を完成させた。年度末の成果発表(Rencontres Pédagogiques du Kansaï 2015, 同 2016 でのアトリエ発表)、分科会発表(日本フランス語教育学会 2016 年度春季大会)を経て依頼を受け、日本フランス語教育学会 2016 年度秋季大会の大会テーマ「グローバル時代のフランス語のかたち：過去から未来へ」のシンポジウムを申請者ら(熊野真規子/Ghislain MOUTON/ 釣 馨)が担当した。

複言語・複文化教育プログラムの学生主体活動をつうじて、多言語・多文化環境にない地方都市においても「自分たちで創り出すフランス文化」が観察されたことから「フランス語を学ぶ学生の新しいモデル」の一つとしてその可能性を紹介し、フランス語・フランス語圏文化を切り口に実施しているフィールドワーク、取材活動、中心市街地活性化と学生交流の参与観察・インタビューをとおり

で最も効果的であった「町を発見するためのフランス語」を例に、外国語・外国文化をきっかけとした新しい形の文化教育ツーリズムの可能性や応用可能性を示した(釣)。

また、地域連携の難しさ(理解と協力を得るには、ボトムアップで実績を積み上げて信用を得る必要があり、時間を要する等)の課題はあるものの、地域の中核としての機能を負うことになった地方大学(特に、Center of Community= COC としての使命を帯びた地方の国立大学法人)において、社会科学系の授業のみならず外国語教育・異文化間教育がフィールドワーク、サービス・ラーニング、キャリア教育、グローバル市民育成、ツーリズム、地域デザインなどととも展開できる可能性を示した(熊野)。

社会還元時間に時間を要する人文分野の従来の実証主義的研究を補完する本研究の行動中心主義的アプローチは学会関係者にインパクトを与え、地方大学、地域でのフランス語教育に携わる機関の複数の研究者らとのネットワーク、新しい若手研究グループなどの誕生につながった。また、学生主体活動のメインイベントであるマルシェに、複数の大学から研修としての参加がはじまり、後述する新たな研究の視点が生まれた。

(2) プロジェクトに参画した学生らの参与観察、各年度の事業後のアンケートおよびリフレクションのワークショップを担当した今中は、「弘前×フランス」プロジェクトを事例として、学生主体のプロジェクト活動の実践知と気づきをテーマとし、学生がどのような実践知を得たと感じているかを明らかにし、またリフレクションによってより深い学びへと導くことができるかを分析した結果、自分達が獲得した知識やスキルよりも教員、協働したチームメンバー、地域住民などを含む他者との関係性に言及しており、活動デザインの改善に関する客観的な洞察も見られること、また特に「葛藤」の経験がより深い学びの契機となったことが明らかになった。この分析結果をフィードバックし、リフレクションを丁寧に行うものへと教育プログラムを改善し、比較のために同様の調査を継続すると同時に、学生の主体性を導くための効果的な授業デザイン、ワークショップデザインの研究をすすめ、国際学会での発表、最終年度の二度の招待講演(公開型ワークショップ)に結びついた。

(3) プロジェクトの主体活動全体と教育プログラムとのつながり、地域活性化の側面の成果の全体像については、学会発表や論文では提示することが難しいため、弘前大学資料館第18回企画展(2018. 2. 21-4. 28)において、その全体像をできるかぎり視覚化して公開し、プロジェクトおよび教育プログラム全体の以下の特徴を示した。

・外国語・外国文化の切り口による地域の再

発見(地域言語/地域文化へのメタ認知的アプローチ)

・外国語教育とフィールドワークの組み合わせ

・ボトムアップと協働(市民性形成)

・言語文化の多様性(言語生態)の保護、言語文化のヒエラルキーの修正(平等の意識へ)

・学生主体活動においては、特に子ども、若年層、子育て世代の学びを意識

・時代や地域の要請とのバランスに自覚的

・社会実験的アプローチによる地域活性

企画展のクロージング企画では、学会関係者を対象としたガイドツアーとディスカッションを実施し、中高からプロジェクト型学習を経験済みのプロジェクト型学習世代のスキル(意識的にせよ無意識的にせよ経験のリフレクションを言語化する際のある種のマニュアル的な「方法論」を身につけている可能性)、FD研修などによる教員のファシリテーション能力の向上がもたらす問題点を提起し、大学教育システム、教養教育についての研究の盲点を意識化させた。

(4) 3年間の課題研究をつうじてもっとも効果的な部分の短期プログラムやワークショップ、プログラムの部分的な活用がはじまっていること、プロジェクトの事業や成果発表の機会をつうじた学生交流によって、大学の立地する地域や偏差値等によらず相互的な学び合いの可能性が見うけられたことから、地域・偏差値・学習環境の異なる複数の大学間交流実験をつうじた、従来型の授業・単位制度の枠におさまらない全人的教育活動としての効果的デザインの研究、臨床教育学の視点からの分析、グローバル意識・言語教育のローカリティ調査、異なる地域・世代・言語・期間での応用プログラムの実施などの研究計画に発展している(本課題研究グループに3名ほどのメンバーが加わる)。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計4件)

- ① 熊野真規子、学生の主体性を考える―「弘前×フランス」プロジェクト参画学生の特例事例から―、査読無、RENCONTRES 32号、2018年(8月発行予定、掲載確定、頁未定)
- ② 熊野真規子、「弘前×フランス」プロジェクト2016(複言語複文化教育プロジェクト[フランス語モデル])、査読無、弘前大学人文社会科学部地域未来創生センタージャーナル第3号、pp. 41-45、2017年
- ③ 今中舞衣子、サービスラーニングにおけるリフレクションと学習活動デザイン―「弘前×フランス」プロジェクトを事例として、査読有、大阪産業大学論集人文・社会科学編 28、pp. 55-74、2016年

<https://ci.nii.ac.jp/els/contents110/010060984.pdf?id=ART0010630861>

[学会発表] (計8件)

- ① 熊野真規子、学生が主体的であるために?—「弘前×フランス」プロジェクト 参画学生の特例事例から考える—、Rencontres Pédagogiques du Kansai 2018 / 第 32 回関西フランス語教育研究会、2018 年
- ② 熊野真規子、2016 年度「弘前×フランス」プロジェクトを振り返る、Rencontres Pédagogiques du Kansai 2017/第31回関西フランス語教育研究会、2017 年
- ③ 熊野真規子・Ghislain MOUTON・釣 馨、地域とともに生きるフランス語 / Le français à l'heure de la globalisation (シンポジウム)、日本フランス語教育学会 2016 年度秋季大会、2016 年
- ④ 今中舞衣子、Quelles activités pour favoriser l'engagement des étudiants?、国際フランス語教授連合 (FIPF) 第 14 回世界大会、2016 年
- ⑤ 熊野真規子、「弘前×フランス」プロジェクト報告、日本フランス語教育学会 2016 年度春季大会、2016 年
- ⑥ 熊野真規子・今中舞衣子・釣 馨、学生主体のプロジェクト活動における実践知と気づき—「弘前×フランス」プロジェクトを事例として、Rencontres Pédagogiques du Kansai 2016/第30回関西フランス語教育研究会、2016 年
- ⑦ 熊野真規子、2015 年度「弘前×フランス」プロジェクトを振り返る、Rencontres Pédagogiques du Kansai 2016/第30回関西フランス語教育研究会、2016 年

[図書] (計2件)

- ① 細川英雄・太田裕子(編)、今中舞衣子ほか著、東京図書、『キャリアデザインのための自己表現—過去・現在・未来を結ぶバイオグラフィ』、222p. (pp. 167-181)、2017 年
- ② 平高史也・木村護郎・クリストフ(編)、國枝孝弘ほか著、くろしお出版、『多言語主義社会に向けて』、240p. (pp. 30-42)、2017 年

[その他]

- ① ホームページ
<http://human.cc.hirosaki-u.ac.jp/french/avenue/projectindex.php>

- ② 企画展 (熊野真規子)
弘前大学資料館第 18 回企画展:「弘前×フランス」—外国語教育×フィールドワークの可能性、2018 年
<http://shiryokan.hirosaki-u.ac.jp/2018/02/1851>
https://www.facebook.com/pg/Place-de-la-Francophonie-251112538270169/photos/?tab=album&album_id=1680152702032805
- ③ 公開ワークショップ (今中舞衣子)、「参加者の主体性と協同性をひきだすワークショップデザイン」、弘前大学人文社会科学部、2018 年
- ④ 公開ワークショップ (今中舞衣子)、「学生の主体性と協同性をひきだす授業デザイン」、宮城学院女子大学キリスト教文化研究所、2017 年
- ⑤ 雑誌記事 (國枝孝弘・福島祥行)、フランスの中等教育と主体性、雑誌「ふらんす」(白水社)92 巻 12 号、pp. 21-23、2017 年
- ⑥ 雑誌記事 (國枝孝弘・福島祥行)、社会の中でのフランス語、雑誌「ふらんす」(白水社) 91 巻 12 号、pp. 20-22、2016 年

6. 研究組織

(1) 研究代表者

熊野 真規子 (KUMANO, Makiko)
弘前大学・人文社会科学部・准教授
研究者番号: 5 0 2 1 5 0 2 6

(2) 連携研究者

國枝 孝弘 (KUNIEDA, Takahiro)
慶應義塾大学・総合政策学部・教授
研究者番号: 7 0 2 8 6 6 2 3

今中 舞衣子 (IMANAKA, Maiko)
大阪産業大学・国際学部・准教授
研究者番号: 3 0 7 0 8 9 2 0

釣 馨 (TSURI, Kaoru)
神戸大学・大学教育推進機構・非常勤講師
研究者番号: 4 0 4 1 9 4 7 9

(3) 研究協力者

ファイフ, ビートルックス (FIFE, Beatrix)
獨協大学・東京大学 非常勤講師